

自分の考えを伝えようとする大切さ

弘前大学教育学部附属中学校

山口 青空

吃音とは何か。それは話すときに最初の一言が詰まってしまうなど、言葉が滑らかに出てこない発音障害だ。自分の言いたいこともうまく言えず、授業の発表、お店での注文、友達との会話でさえも満足にできない。今の私にとつては考えられないことだ。思ったことを口にできないことはとてもつらいし悔しい。また、人とコミュニケーションをとることも難しくなると思うときびしい気持ちになる。この本の著者も吃音だ。その少年時代をモデルとして書いたのがこの本だ。うまく話せないなか、少年はどのようにして自分の考えを人に伝えたのだろうか。

少年はクリスマススイブに両親から包みもらった。中身はいちばん欲しかったものではなかったが、私は喜ぶと思っていた。しかし、少年はその包みをタンスの角に叩きつけた。まさか、少年がもらったものを壊すとは思ってもみなかった。いちばんではなくても、少年にとつて欲しいものだったはずなのになぜだろうか。しかし、少年の感情が少しだけわかっ

た。普通の子だったらいちばん欲しいものを素直に伝えられるが、吃音のため伝えたくても伝えることができない。それに、少年にもプライドがあり、黙って指を指して伝えたくなかった。結果として、いちばん欲しかったものも手に入れられず、吃音でプライドが高い自分自身が悔しくて、いらだつてそのようなことをしたのだろう。私も人にものをうまく伝えられないときに、少し情けないと思うことがある。少年と私は少し似ているところがある気がした。

その夜、少年は「きよしこ」に会う。その二人の会話の途中にきよしこはこんなことを言った。

「それが、君のほんとうに伝えたいことだったら……伝わるよ、きつと」

この言葉が私の心に響いた。抱きついたり手をつないだりしていれば伝えることができる。私も抱きつかれたことはないが、うまく説明されなくてもなんとなく伝わるがあった。好きなものの話を私にしてくれる友達がいる。その人は懸

命にそのものの魅力を伝えようとしてくれる。言っていることに違和感があるときでも、何を伝えたいかはほんやりわかる。それはその人の必死さや熱意、足りない言葉を感情が補い、他の人の心へ伝えるからだ。心と心がつながるとわかりあえる。少し嬉しいと感じた。

翌朝、少年はきよしこにいわれたとおりに母親と父親に抱きついた。少年の気持ちは安らぎ、想いを伝えることができた。いわれたことをしただけだが、それもすごいと思った。うまくいかないかもしれないのに、すぐに実行する少年を私は見習いたい。

私たち日本人は周りに流されやすい人が多いと思う。少なくとも私はその典型だ。それは、自分の考えが人にうまく伝

わらないのではないかと考えたり、そもそもやってみようと
思わないからだ。だから自分の考えもいわずに、人について
いくだけになってしまふ。確かに楽だが、考えたことを伝え
られないことが続いていくと悔しい気持ちでいっぱいになり、
少年のように限界がくるかもしれない。だからこそ、きよし
こが教えてくれたように、自分の意見を伝えようとするべき
だ。うまく話せなくても、伝えようとするだけで人に伝わる
かもしれない。そして、少年のように思い切つてやってみれ
ば、案外いい結果が得られるかもしれない。吃音の人でも人
に考えを伝えられるのなら、私たちはもっと簡単に人に伝え
られるはずだ。どんなときでも人に自分の考えを伝えようと
する姿勢を大切に、対話を楽しめるようにしたい。